直接に幼児が経験したプロセスの質に影響している。具体的には、学級規模、教師と幼児の比率、教師の経験、教師教育や専門に関する研修、そして安全、衛生と健康の環境、教材設備の質などを指す。

⑤大人の仕事環境の質：幼稚園の給料、福祉、幼稚園の人員移動、教師の満足度、仕事承諾やプレシャーなど。

⑥Sallis（1993）は、教育の市場化や全面的に質管理の思潮を追い、教育をサービス業として社会的に注意を喚起し、これからの10年間は教育サービスの質が各国の教育部門の重要な課題となることを指摘する。Moss と Pence（1994）も、政府、専門家、学者が持つ権力や影響力によって幼稚園の質を定義することであれ、市場における顧客の好みによって幼稚園の質を定義することであれ、全て排外的なパラダイムであり、幼稚園の質自身が一つの相対的な概念であり、ダイナミック、持続的な概念であると指摘する。

⑦幼稚園質の分類：

i 内部方向付けの幼稚園質：プロセスの質、構造の質、大人の仕事環境の質に焦点を当てる幼稚園の質である。

ii 外部方向付けの幼稚園質：サービスの質と全面的な質を強調する幼稚園の質である。

三．幼稚園の質の評価（アメリカでよく使われている6つの幼稚園の質評価の手段）

1．幼稚園の質検査表（PGQDCC）

①提出者：Bradbard と Endsley,1979

②幼稚園の質に関する定義：幼稚園が入学前の幼児の適切な発達を促す

③構成：健康や安全、大人と幼児の相互作用、器材・設備・活動、保護者協力と幼稚園環境の5つの方面の64題の問題によって構成する。

④信頼度：採点者信頼度は．75（p<．01）

再測信頼度は．80（p<．01）

高い質の幼稚園が80%の問題について低い質の幼稚園より結果が良い(p<.01)（Bradbard,Endsley,1979）

表1　幼稚園質検査表の要素と方向付け

内部　方向付け			外部　方向付け	
プロセスの質	構造の質	大人の仕事環境の質	サービスの質	全面的な質
大人と幼児の相互作用	器材・設備・活動	大人と幼児の相互作用	保護者協力	
器材・設備・活動	健康と安全			
	幼稚園環境			

2. 幼稚園環境の量的評価表（ECERS）

①提出者：Harms,Clifford,Cryer,1980

②目的：幼稚園管理者の自己評価、教師の自己評価、教育主管機関の管理、幼稚園の質を改善する

③信頼度：

ⅰ．78%の内容が高度重要性、1%の内容が低度重要性

ⅱ．効果度は．74

ⅲ．採点者信頼度は．93

④幼稚園環境の量的評価表の修正（ECERS－R,Harms ら,1998）の構成：空間と設備、個人配慮、言語と推理、活動、相互作用、日課構成、保護者と教師

表 3　幼稚園環境の量的評価表（ECERS－R）の要素と方向付け

内部　方向付け			外部　方向付け	
プロセスの質	構造の質	大人の仕事環境の質	サービスの質	全面的な質
個人配慮	空間と設備	保護者と教師	日課構成	
言語と推理	日課構成		保護者と教師	
活動				
相互作用				
日課構成				

3. 幼児教育機関認定標準

①主催者：アメリカ幼児教育協会（NAEYC）、1985

②認定対象：幼稚園、保育園、保育センター、保育所など 0 歳から 8 歳までの幼児教育を行う機関

③1984 年作成、1998 修正、DAP 教育を反映する

④構成：教師と幼児の相互作用、カリキュラム、教師と課程の関係、教職員資格と専門向上、行政、学級編成、物理環境、健康と安全、栄養と食物、評定

表 4　幼児教育機関認定標準の要素と方向付け

内部　方向付け			外部　方向付け	
プロセスの質	構造の質	大人の仕事環境の質	サービスの質	全面的な質
教師と幼児の相互作用	学級編成	教職員資格と専門向上	評定	

カリキュラム	物理環境	行政	教師と家庭の関係	
	健康と安全	評定		
	栄養と食物			
	教職員資格と専門向上			
	評定			

4. 幼児教育の質評価表（PQA）

①主催者：見通し教育研究基金会

②アプローチ：High/Scope approach

③主張：

i 子どもの自発的に学ぶこと、学習環境創ることである

ii 自ら思考力、自発性、創造力

iii「計画・活動・振替」を日課とする

iv 大人が援助する役割を果たす

④High/Scope approach を基にして拡張した評価の手段：COR、PQA、PIP、ELA など

⑤構成：大人と幼児との相互作用、学習環境、日課活動、カリキュラム計画と評価、保護者参与、家庭協力、教職員資格と専門向上、行政管理

表 5　幼児教育の質評価表（PQA）の要素と方向付け

内部方向付け			外部　方向付け	
プロセスの質	構造の質	大人の仕事環境の質	サービスの質	全面的な質
大人と幼児との相互作用	学習環境	教職員資格と専門向上	保護者参与と家庭協力	行政管理
学習環境		行政管理	行政管理	
日課活動				
カリキュラム計画と評価				

5. 幼稚園質評価表（APECP）

①提出者：Abbott－Shim、Neel と Sibley,1987

②対象：赤ちゃんから入学する前の幼児にサービスを提供する機関

③手段：教室観察記録、資料研究、教師へのインタビュー

④信頼度：i 内容の面：作者本人が 10 年以上の幼児教育経験を持ち、資料も専門家に認

められている。

ii 再測信頼度は．90〜．97 の間

iii 相関係数は．64

⑤構成：i 行政の面：施設と設備、給食、幼稚園管理、幼稚園改善、人事

ii 教授の面：安全と健康、学習環境、日課計画、カリキュラムと相互作用

表 6　幼稚園質評価表（APECP）の要素と方向付け

内部　方向付け			外部　方向付け	
プロセスの質	構造の質	大人の仕事環境の質	サービスの質	全面的な質
日課計画	施設と設備	人事	幼稚園管理	幼稚園管理
カリキュラム	学習環境	幼稚園管理	幼稚園改善	幼稚園改善
相互作用	安全と健康	幼稚園改善		
	給食			

6. アメリカ国家推奨の卓越した教育の標準

①提出機関：アメリカ教育部、1998

②3 つの機能：教育機関の勤務態度、能力、結果を促す；教育機関と機関との間の疎通や優れた実践の共有を協力する；教育機関の業績を管理する手段である

③3 つの目標：継続的な改善の価値観を宣伝することによって教育の質を向上する；教育機関の役割や能力を改善する；教育機関や個人の学習を促す

④中心価値観：将来性のある指導、学びを中心とする教育、機関や個人の学習、教職員と同僚の仲間関係を重視、柔軟性、将来性、創造性、データ管理、社会的な責任、結果重視と有効性、系統性。

⑤構成：リーダシップ、戦略的な計画、学生・関係ある人たちに焦点を当てること、教職員に焦点を当てること、測定・分析と知識管理、プロセス管理、幼稚園実業の結果

表 7　卓越される教育の標準の要素と方向付け

内部　方向付け			外部　方向付け	
プロセスの質	構造の質	大人の仕事環境の質	サービスの質	全面的な質
プロセス管理	幼稚園実業の結果	プロセス管理	プロセス管理	プロセス管理
幼稚園実業の結果		幼稚園実業の結果	幼稚園実業の結果	幼稚園実業の結果
		リーダシップ	リーダシップ	戦略的な計画

		教職員に焦点を当てること	学生・関係ある人たちと市場に焦点を当てる	測定・分析と知識管理
				学生・関係あるひとたちと市場に焦点を当てる

四．台北市の幼稚園評価モデル

1. 関連政策：「台湾地区公私立幼稚園評価実施要点」
2. 評価モデル：背景—輸入—プロセス—結果
3. 評価の内容：「幼児教育行政」、「教授と保育」、「教授設備と公共安全」（2005 年現在）

表 9　台北市幼稚園評価の要素と方向付け

内部　方向付け			外部　方向付け	
プロセス質	構造質	大人の仕事環境の質	サービス質	全面的な質
経営理念（1.25%）	園長と教師の成長（1.3%）	経営理念（1.25%）	経営理念（1.25%）	経営理念（1.25%）
カリキュラムと教授（10%）	行政運営（2.5%）	園長と教師の成長（1.3%）	園の業務指導（2.5%）	園の業務の改善（5%）
園長と教師の成長（1.3%）	迎えと見送り制度（5%）	行政運営（2.5%）	家庭と団地の相互作用（10%）	
	衛生保健と食物の栄養（5%）	園の業務指導（2.5%）		
	教授情景設計と計画理念（10%）	人事制度（5%）		
	園地面積と園舎建築（5%）	財務制度（5%）		
	教授施設と使用管理（5%）	総務制度（5%）		
	教授施設と公共安全（10%）			

4. 考察（台北市幼稚園評価のモデル）

①カテゴリー：プロセスの質、構の造質、大人の仕事環境の質、サービスの質、全面的な質

②外部方向付け：構造の質、大人の仕事環境の質を重視している

③内容：

ⅰ．プロセス質における経営理念・カリキュラムと教授・園長と教師の成長が12.55%を占め、その中で最も幼児教育の質を反映できるカリキュラムと教授は10%しか占めていない。しかも前述のアメリカの6つの評価標準と比べると比率が比較的に低い。

ⅱ．構造の質と大人の仕事環境の質の比率がかなり大きい（66.35%）。そのため、評価の結果は園がプロセス・サービス・全面的な質における努力や成果を示していない。

ⅲ．外部方向付けに関する比率は比較的低く、局部的、曖昧かつ抽象である。

五．総合的な考察

①幼児教育の質は一つの幼児教育のプロセスを中心として多段階的な概念であり、幼児教育のプロセスの質、教室の質、そして、幼稚園の質と幼児教育体制質などに触れ、範囲も徐々に広くなっている。その中で、内部方向付けの幼稚園の質がプロセスの質、構造の質、大人の仕事環境の質に焦点を当て、外部方向付けの幼稚園の質がサービスの質と全面的な質を強調する。

②アメリカでよく使われている6つの幼稚園の質評価の手段を比較しながら検討した結果は：

ⅰ．カテゴリー：卓越した教育の標準＞NAEYC の幼児教育機関認定標準＞幼稚園質評価表（APECP）＞幼児教育の質評価表（PQA）＞幼稚園環境の量的評価表（ECERS－R）＞幼稚園質検査表（PGQDCC）

ⅱ．外部方向付け：卓越した教育の標準＞NAEYC の幼児教育機関認定標準＞幼児教育の質評価表（PQA）＞幼稚園質評価表（APECP）

③台北市の幼稚園評価：

ⅰ．積極的な意義：幅広い、幼稚園質の現代概念に適応し、外部方向付けの特徴を持つ。

ⅱ．不足点：カリキュラムと教授は10%しか占めていなく、比率が比較的に低い。また、構造質と大人の仕事環境の質の比率がかなり大きいので、評価の結果は園がプロセス・サービス・全面的な質上における努力や成果を示していない。最後に、外部方向付けに関する比率は比較的低く、局部的、曖昧かつ抽象的である。

④幼稚園質評価標準はただ評価制度の一環であり、他の環節とのつながりも大事である。例えば台湾における幼稚園質評価はプロセスより結果を重視する傾向があるため、評価の目的を見落としている。本論文で検討した幼稚園質評価の標準が幼稚園質評価の実践において参考になれるが、各園がそれぞれの特徴を持ち、絶えず改善でき、継続的な新たな進展が出来ることが大事である。

薛婷芳，廖凤瑞 1999 「従幼稚園参與評鑑之経験看幼稚園在教保転変之歴程—個案研究」『國立台北師範学院学報』 第 12 期 國立台北師範学院

幼稚園評価に参加する経験から見た幼稚園の変革
——1 つの幼稚園の事例研究を中心として——

概要：

本研究では質的研究の手法を使い、幼稚園の立場から評価の実施を考察する。考察した結果は：1. 評価自体や評価委員たちの訪問がきっかけとして幼稚園自身の反省や変化をもたらす。2. 幼稚園の変化が継続的、循環的であり、しかも非直線的である。3. 評価以外、幼稚園の変化や成長をもたらす他の要素もある。例えば、園長のリーダシップや機関の雰囲気、園内教師の参加度、行政のサポート、評価制度、幼稚園の体制などである。それらの要素が幼稚園の成長や発展に与える影響は生態系統の理論と一致する。最後に幼稚園の経験から幼稚園評価の実践に関する提案を論じる。

キーワード：幼稚園評価　認可モデル　幼児教育

壱. 前書き

1986 年に幼稚園評価制度が実施されて以来、幼稚園評価制度に関する研究がたくさん行われている。これらの研究が大まかに 5 種類に分けられる。1. 評価の内容に関する検討　2. 評価委員が評価実践に関する個人経験を語る　3. 理論上の評価制度の是非を検討　4. 園長が評価に関する見方の検討　5. 教育機関が発行した評価報告に関する検討である。

しかし、以上の検討が全て結果論の視点から評価自体の是非を解釈し、評価後に振り返って評価の過程に関する分析を行っているが、実際現場に入り、評価と幼稚園との相互作用や幼稚園が評価を受ける過程に関する調査研究が少ない。ここで、本論文では、幼稚園関係者の立場から、幼稚園が実際評価に参与する時に、「如何に評価を思うか」、「どのような変化を経験するのか」、「それらの変化をもたらす要素は何か」などについて幼稚園評価の意味や効果を検討したい。

弐. 先行文献

一. **評価の概念**：近年来、評価に関する定義がいくつかの転換を行った。一般的には、性質の発展によって 4 つの大きな転換に分けられている。

1. 評価はテスティングである。
2. 評価はカリキュラムの目標が実際の学習状況と一致する程度の判断である。
3. 評価は専門的な判断である。
4. 幼稚園関係者を中心とした評価である。

二．幼稚園評価

1．目的：幼稚園評価を行うことによって、幼稚園の是非を診断し、幼稚園関係者に改善案を出し、幼稚園が高い質に達しているのかを判断し、教育行政機関や政策の設定に参考されるアドバイスをすることが目的である。

2．幼稚園評価の認可モデル（accreditation model）

①主催者：アメリカ幼児教育学術委員会（NAEPC）、1996

②評価の内容と標準：幼稚園関係者と幼児との相互作用、カリキュラム、幼稚園関係者と保護者との相互作用、幼稚園関係者の質と成長、行政、教師と幼児との比率、幼稚園環境、健康と安全、栄養と給食、そして評価など

③評価のプロセス：自己評価→評価実施→評価委員会が結果を決定→報告

④評価委員：幼児教育に関する専門家、大学幼児教育或は児童発展の学位、現場での経験を持ち、客観的、評価に関するトレーニングを受けた人である。

三．評価が幼稚園に与える影響

1．アメリカの Herr,Johnson,Zimmerman（1993）は、インタビューの手法を使い、アメリカ NAEYC の幼稚園評価認可制度の効果を探究した。彼らの調査によると、評価を受けた幼稚園のほとんどの園長たち（95%）は、三年間の認可期限が切れたら再び評価を受ける姿勢を表した。その原因は、1．評価に参加することで園が成長できる（49%）。2．評価を受けることは園の質を表し、他の園のモデルになれる（39%）。3．評価の過程が幼児教育の専門性を表す（32%）。4．評価に参加することによって教職員や保護者たちを奮い立たせる（24%）。

2．頼志峰（1997）は、メタ評価の視点から、インタビューの手法を使い、台北市 93～95 学年度における幼稚園評価制度を検討した。学者、専門家や園長たちは幼稚園評価に対する見方がまちまちであることが明らかになった。

四．台北市における幼稚園評価

1．評価の内容：「理念と行政」、「教授と保育」、「環境設備と利用」

2．評価のプロセス：

評価を受ける幼稚園が「幼稚園評価説明会」に参加する

↓

幼稚園の自己評価

↓

自己評価ハンドブックを教育局に提出

↓

評価委員と評価を受ける幼稚園が一回目の訪問時間を決定

↓

一回目の訪問

↓

評価を受ける幼稚園が評価委員たちの提案によって幼稚園を改善する

↓

二回目の訪問

↓

再び評価委員たちが推薦された「成績が優秀」な幼稚園に訪問する

（事前不通知）

3. 評価の特色：

①認可モデルの専門判断の原則や幼稚園関係者を中心とした評価のもとで評価を行う。

②評価委員が訪問する回数が昔の一回から二回に増えた。

③訪問時間が評価を受ける幼稚園と評価委員たちと共に決定する。

4. 評価を受ける幼稚園の種類：

①申請評価：自ら評価受けることを申請する幼稚園、17 園

②抽出評価：三年以上或は最近の三年間に評価を受けたことのない幼稚園、53 園

③指定評価：最近の一年間以内に評価を受け、「成績が悪い」結果になった幼稚園、10 園

参．研究方法

1. 研究対象：台北市中山区にある公立幼稚園（A 園）、1985 年に設立、園長は藍園長、教師は 6 名、学級は 3 つ、幼児は 90 名である。

2. 研究方法：観察とインタビューを中心とし、資料研究を補助条件として研究を行う。筆者は「消極的受動的な参加者」の役割として教室内外に起こった「出来こと」を観察する。インタビューは平日の観察で特に関心がある点や疑問、実践者たちの心の動きや心理などについて伺っている。期間は 1997 年 11 月中旬から 1998 年 5 月の中旬まで、6 ヶ月間である。

3. 資料の整理と分析

①資料の整理によると、A 園が評価を受ける過程における 3 つの段階を経験したことが明らかにした。つまり、「衝撃」、「反省」、「変革」である。

「衝撃」：園内の者が「出来事」に会う時に、自分の元々の考えとの違いが出て、そこから発する矛盾、不安、不明確などの感情のことである。

「反省」：園内の者が「衝撃」を受け、その衝撃と関連ある原因を探求し、そこから現状に対する困惑、躊躇や疑問、そして発見、探求しようとする行動、

問題解決の方法を探すことである。

「変革」：園内の者が衝撃や反省した後に具体的な行動である。

②上述のような 3 つの段階がそれぞれ独立しているわけではなく、重複的、循環的な形として表している。

③全体的に言うと、A 園が全ての評価過程において 3 つの「衝撃、反省、変革」の段階を経験した。本研究では、一回の過程は「一波循環」と呼ぶことにする。

④資料の分析の信頼度が高いと言える。

肆．研究の結果

一．第一波循環（1997 年 9 月 26 日～1997 年 11 月 19 日）

1. 衝撃（幼稚園評価説明会の後）：園長や教師たちが「自ら評価を受けることを申請するか」、「評価を受ける目的は何か」を考え、自ら申請することを決める過程によって、幼稚園の方が評価を受ける目的を理解した。これは、①園の成長を追求する②A 園はもう連続的に 4 年間評価を受けていないので、もし今年受けないなら、どうせ来年受けることが決まっている③園長の希望
2. 反省（自己評価の段階）：教師全員が幼稚園の問題を発見、共同で解決法を探求する。①如何に自己評価を行うか②自己評価の過程において何の問題を発見したのか
3. 変革（一回目の訪問の前）：幼稚園の問題に対して実際に具体的な改善行動をする。しかし、これらの行動はほとんど訪問についての細かい改善である。

二．第二波循環（1997 年 11 月 20 日～、一回目の訪問をきっかけ）

1. 衝撃（一回目の訪問）：評価委員たちが A 園に与えたいくつかの改善案に多くの教師が受け入れられると述べた。
2. 反省（11 月 25 日、一回目の訪問後の園内会議から 3 ヶ月）：園長を初め教師たちが討論した改善案を実施する。この段階の反省は「教授と保育」に関する問題の改善を主として行った。具体的には、まず幼児の要求を分かるために、幼児能力測定表や各学級では学習区の変わりに活動コーナーを作る。また、改めて教授形態やカリキュラムを設計する。
3. 変革（1998 年 1 月 20 日～二回目訪問する前）：A 園は反省の結果を実際の実践の中に応用する。それぞれ、教授形態、教室日課、職務ハンドブックを通して行う。

三．第三波循環（1997 学年度新学期）

1. 衝撃：教師たちは自信がないので、新しい教授法や環境に関する疑問、違和感や圧力感の衝撃である。
2. 反省：「幼児たちによって最も大事なのは何か」に関して討論し、解決法を探究する。
3. 変革：評価委員たちのアドバイスによって修正、調整する。

四．結論

A園が全ての評価過程において3つの「衝撃、反省、変革」の段階を経験した。毎回の波循環の焦点が違い、その中、第二波の変化が最も顕著であることが明らかとなった。全体的に、A園の変化が「討論」によって行い、A園の成長を促している。

伍．総合的な考察

一．評価が幼稚園の成長を促している。

二．変化と成長の原因：評価参加の動機、園内教師は評価への参加度が高い、幼稚園本来のほぼ開かれている教授方式である。

三．幼稚園の生態系統が幼稚園の変化と成長に影響を与える

＊生態における4つの層面（微系統、中間系統、外部系統、と大系統）は、幼稚園が評価を受ける過程における変化にそれぞれある程度の影響を与えている。そのため、評価制度の実施や幼稚園にもたらす変化をみる時に、単なる一つの側面や視点から検討することではなく、幼稚園の環境や幼稚園自身の条件を基盤として全面的な考察を行う必要がある。

陸．提案

一．幼稚園に関する

1. 幼稚園が評価に関する正確な理念をたてる
2. 自ら評価を受ける意識を促す
3. 全国的に評価に参加することを宣伝する
4. 関連ある環境を提供する

二．これから研究の課題

幼児の反応や教授における教師と幼児との相互作用が評価に与える影響、また、自ら評価を受ける幼稚園と指定評価の幼稚園では心理上にも違いがあるので、指定幼稚園の事例を拡大することが今後の課題として残されている。

陳淑芳　2004　「台東県幼稚園評鑑實施成効研究」　『台東大学教育学報』　15（2）
NTTU EDUCATIONAL RESEARCH JOURNAL,2004,15(2)

台東県における幼稚園の評価の実施効果に関する研究

要旨

教育部の「幼稚教育の発展と改善に関する中期発展計画」の下で、台東県が2001年度に台東県における公私立幼稚園の評価を行った。本論文では、その実践の例を取り上げ、評価前の準備、評価の内容・過程、評価の結果、そして評価後に園に対する期待やアドバイスなどによって、評価に参与している人々の経験や意見を整理する。また、メタ評価の視点によって、効用性、実行性、適切性、厳密性という4つの側面、14の基準から台東県幼稚園の評価の質を検討する。ここで、評価政策の制定と実施を検討し、幼稚園の評価の実践を批判的に捉え、また、地方政府が幼児教育の評価を実施する改善案を検討することを目的とする。

本研究の基本となっている資料は「台東県における幼稚園の評価と影響効果に関する研究」である。この資料は筆者及び幼児教育研究所の院生たちの協力によって作られる。データの収集期間は2001年10月末の評価直後から2001年12月の評価の最終結果が発表される前までである。研究対象は、評価を受けている幼稚園の園長や教師、評価委員、そして地方政府の幼稚園の評価を担当する人々である。資料はインタビューを主とし、文献や資料などの収集（会議資料、園所の自己評価の資料、評価成果の資料など）を加えたものである。

研究結果：中央政府が地方政府に補助金を与えることのよって、地方政府が幼児教育の評価制度を固める役割を果たしていることが明らかとなった。しかし、中央政府の指示に従い、評価の標準・点数の統一などの影響で、地方教育の自主権を大いに弱める傾向がある。一方、地方政府が自発的な計画性や幼教の質に関する積極的に援助の意識が乏しいため、実際の評価実施する時に、形式や効率だけを追及し、評価の本来の意図を無視する結果になってしまう。そのため、人的資源や財力資源がたくさん使ったのに、時間の不足や評価標準の統一化、評価の手順や専門知識が足りないなどの原因で、実際の結果は幼教の質を向上するという元々の意図とすっかり裏腹になり、教授の妨害、悪性競争、意気消沈、更に「資料整理を大事」にし、「実際の教授はあまり重視しなくてもいい」という間違った考えさえも生じている。

その他、本文では、台東県幼稚園の評価の事例の是非に関する提案をし、最後に中央政府の教育政策である「西部化・北部化」の過ちを批判的にも検討した。つまり、西部の比較的に進んでいる幼稚園の基準を使い、東部の辺鄙な地域の幼稚園を評価することを批判し、地方の幼稚園の特徴を捉え、地方幼稚園の評価制度のより有効な役割を果たす必要が

あることを明らかにした。

キーワード：幼稚園　教育評価　CIPP

一．序論

1．研究背景

＊ 政策面：「幼稚教育の発展と改善に関する中期発展計画」、「台湾区公私立幼稚園評価実施要点」
＊ モデル：CIPP モデル（背景・導入・過程・結果）
＊ 項目：「理念と行政」、「環境設備」、「教授活動」
＊ 台東県の幼稚園評価制度：
①94 年から中央政府から補助金をもらい、途中の 98 年～2001 年補助金中止、2001 年から再びもらえるようになった。
②やる気があるが、時間が足りない。
③評価の結果が政策を変化させ、幼稚園の質の向上をもたらせるのか検討する必要がある。

2．研究目的

＊ 台東県幼稚園の評価の実施効果を検討する。
＊ 幼稚園評価実施効果に影響する各要素を検討する。
＊ 幼稚園評価の改善に具体的なアドバイスを行う。

二．先行研究の検討

1．教育評価が幼稚園における応用

①教育評価の定義：Decision-Oriented Evaluation と Value-Oriented Evaluation
②幼稚園評価の目的：幼稚園の質を向上する
③台湾における幼稚園評価の流れ
自由輿政時期―普遍実施時期―CIPP 全面実施時期―停止時期―全国性と地方性共存時期

2．CIPP 評価モデルは幼稚園における応用

＊CIPP 評価モデルの基本概念：背景評価、導入評価、過程評価、成果評価
＊幼稚園における CIPP 評価モデルの実施：①目的：幼稚園の自己改善を促すため
②過程：説明会→参加するかどうかを決定→自己評価→訪問→再び訪問

③影響：幼稚園自身の改善のきっかけ、反省、変革を促す

④現状：CIPP の 4 つの評価の実施がすべては整っていない

3. 評価の質に関する評価

＊教育評価の現状の改善すべき点：正確な評価の観念を形成する、評価委員を慎重に選択する、訪問時間を延長する、関連ある人々の意見を考える、質的と量的の評価方法を併用する、評価報告書の改善など

＊ メタ評価：評価自身に関する評価の科学的な過程

＊ メタ評価は評価の計画・設計を改善でき、評価案の質や価値を判断することもできる

＊ JCSEE のメタ評価の標準（4 種類 30 項目）

＊ メタ評価は実践上の事例：頼志峰（1997）と蘇慧雯（2003）は台北の幼稚園の質の評価に関する調査

＊ 調査結果：①評価制度に関して園長の考えはそれぞれ

②まとめ型の評価になる傾向がある

③評価する人々の主観に影響される可能性がある

＊ まとめ：教育評価は評価実践において、重要な役割を果たしているが、またたくさん不足している部分が存在している。

4. 台東県幼稚園評価の実践

＊評価実践の導きとしての評価グループ：

①グループの構成：学者専門家、教育行政の代表、幼稚園先輩の園長によって、4 人で 1 つのグループをつくられている。

②評価委員会議：全部で 3 回、それぞれは準備会議（準備段階）、初審会議（始めでの評価）、複審会議（二次会評価）

③評価の粗筋：

2001 年 9 月 25 日～2001 年 11 月 1 日

幼稚園現状調査表と自己評価表を書き込み→関連資料の準備→評価時間の決定→評価グループの訪問

④評価訪問の流れ：

時間：一日

朝、幼稚園に到着→幼児活動や親の見送る風景を見る→簡単な報告を聞く→項目によって評価やインタビューを行う→グループ討論→口頭で評価結果を報告→援助会談を行う

＊ 評価規則の制定

①前の評価基準、評価の中心、評価の項目を参考に、内容的に手を入れる

②奨励：五分の一の幼稚園に補助金を出す、その他「個別成績優秀奨」を設け、賞状やメダルを授ける

③評価モデル：CIPP モデル

＊ 評価結果

補助金をもらえる幼稚園：公立幼稚園 24 園中の上位の 4 園、私立幼稚園の 16 園中の上位の 4 園

個別成績優秀奨：私立より公立幼稚園の数が多い

＊ 評価報告

①報告書：「幼稚園カリキュラムと教授の質に関する調査」

②分析結果：幼稚園の教師自身が教授に関する努力や態度は大変よいが、また足りない点もたくさん存在している

③問題点：

行政面：教師移動、教員免許持っていない教師の割合が大きい、私立幼稚園の教師は給料が低い、教員研修が足りない、個別指導や個人指導の実施など

教授面：

課程設定：全て英語で授業を行うことができていない、教科別の教授の危機

教材と教授：伝統的な質問式教授法から談話式教授法への転換が必要

資料整理：資料を再整理し、発達障害児の受け入れに備える

団地協力：台東地域の特徴と結びつき、親や団地の教育活動と合わせて、幼児教授を展開する必要

三．研究方法

1. 研究対象：40 ヶ所の評価を受けっている幼稚園の中の 39 ヶ所の園長や教師（41 名）、評価委員そして地方政府教育行政の幼稚園評価を担当する人員（14＋1 名）である。

2. 研究方法：

①資料や文献と合わせ、半構造化インタビューとアンケート調査を行う

②資料や文献の整理時間：2001 年 10 月末～2001 年 12 月

③アンケート調査：評価委員、園長、評価実践と関連ある人々が評価の標準や実践上の問題点に関して伺っている。

3：資料分析とコード化：

①個別インタビュー内容のカテゴリー化：評価前の準備、評価の意義と役割、評価の過程、評価の影響、期待とアドバイス、課題

②被訪問者たちのプライバシーを守るためコード化する。

機関性質：1－公立、2－私立、3－評価委員

受訪問者：001～023、無作為抽出

職務コード：1－園長、2－教師、3－行政人員

例：1001－2は、ある公立幼稚園のコード番号が1である教師のことを指す

注：訪問を受ける人の中で園長が極めて多いため、1－園長のコードが省略とする

例：「1002－1」は「1002」を省略とする。

4. 研究の限定性

①筆者は評価委員の一人として、完全に部外者の立場から客観的に事実を見ることができないが、評価者として、全部の資料を揃えることや評価グループの内部決定に影響される各要素に関する理解が把握できる。

②筆者は最終評価や二次会評価を参加したが、評価に関して最も肝心な訪問評価段階には参加していなかったので、ある程度で部外者の立場を保つとは言える

③インタビューは院生たちの協力によって行うので、より客観的な事実を伺える

④本研究では、評価を受ける人々のインタビューを中心として展開する

四. 研究の結果

1. 評価前の準備段階

①参与者たちの評価に関する経験

園長と教師：41名の中に9名が一回も評価する経験がない（22%）

評価委員：15名の中に経験者8名、未経験者7名

結論：評価委員が幼稚園を評価しているだけではなく、実践者たちも評価委員を評価している。

②評価を受ける人側の心理：平常心で臨むのが6名しかない、その他は皆プレシャーを感じると述べた。また、プレシャーを感じるがやっぱり参加したいのは8名であり、それ以外は全部参加したくないと述べた。参加したくない原因は幼稚園自身の条件不足、評価の要素、公平性、評価委員たちの姿勢などである。

③準備する時間や評価時間に関して

全体的には時間が足りないと述べ、また、評価通知書が幼稚園に届く時間の差があるため、準備する時間もそれぞれ違う（不公平とプレシャー）。その原因は行政の方がタイムリーな通知がしていないのである。

④評価の意義と目的に関して

改善を促す（10名）、優秀園を励ます（5名）、成長を促す（7名）、現状を把握（6名）、自己理解を促す（5名）

また、評価の意義や目的をよく分からない園長もいる

2. 評価の内容と過程

①評価基準の制定

プラスな意見：基準が去年より明確化し、項目がより細かく、より完全的である

マイナスな意見：項目が細かすぎ、形式的な評価表で全ての幼稚園を評価することが不公平（個性を無視）

書面の材料の処理や保存するため、教師たちの残業する時間を増やす

②評価の準備の重点：「行政ハンドブック」

つまり、行政資料を整理するため多くの時間がかかる。また、親の協力がないと大変である。

③評価結果：

i．評価の影響効果

プラスな効果：資料の処理や保存を促す、今まで気づかなかったことを積極的に知る、教授や行政上において新たな成果がある、経済的な面の援助をもらう、教師も奨励をもらえる、肯定的な評価がもらえる、幼稚園を宣伝する

マイナスな効果：仕事の量が増えている、通常の教授を邪魔になる、教師のプレシャーになる、幼稚園を傷つける

ii．成績発表：「喜憂」半分、つまり優秀園では人心を奮い立たせるが、落ちた幼稚園が挫折感を味わう

④評価を受ける人々が評価実践に関する期待やアドバイス

i．事前計画と準備：評価の専門性を高める、園長が評価に関する研修が必要、事前指導や通常の指導がほしい

ii．評価内容方面：評価の中心を調整する、評価標準の設定を調整する、評価実施の過程を調整する、

iii．評価標準の客観性

iv．個性を重視する

vi．公立と私立幼稚園を区別する

3．評価結果方面

①奨励や激励を増やしてほしい

②善後策がもっと重要！

四．台東県幼稚園の評価の質に関する分析

1．CIPP モデルによっての分析：導入評価を主とする、その次は過程評価、結果評価で、最後は背景評価である。結果的にはCIPP モデルの「改善を導く」評価精神に達することが難しい

2．JCSEE 標準評価：

①効用性：評価者の信頼性を向上、評価を受け側の疑問や要求への関心を寄せる、評価報告を通して再び園に援助や指導する必要がある。

②実行性：台東県における各幼稚園の個性や格差を十分に重視していない。

③適切性：計画する時間の不足と意思の疎通を欠くことである

④精確性：訪問時間の限定性や資料を中心として評価するため、CIPP 評価モデルの「改善を促す」という目標を達成することが出来ない。

五. 総括

＊中央政府が地方政府に補助金を与えることによって、地方政府が幼児教育の評価制度を固める役割を果たしていることが明らかとなった。しかし、中央政府の指示に従い、評価の基準・点数の統一などの影響で、地方教育の自主権を大いに弱める傾向がある。一方、地方政府が自発的な計画性や幼児教育の質に関する積極的な援助の意識が乏しいため、実際の評価を実施する時に、形式や効率だけを追及し、評価の本来の意図を無視する結果になってしまう。

＊CIPP モデル評価における「背景」や「結果」評価を重視していないため、個々の幼稚園に適切な改善案を与えることができない。

＊台東県における評価実践が幼稚園自身の成長、変革を促すこと見いだしていない。

＊中央政府の「西部化・北部化」の教育政策、つまり、西部の比較的に進んでいる幼稚園の基準を使い、東部の辺鄙な地域の幼稚園を評価することは適していない。地方の幼稚園の特徴を捉え、地方幼稚園の評価制度のより有効な活用はかる必要があることが明らかになった。

陳雅玲　2003　「幼稚园評鑑缺失的探討」　幼儿教育年刊　第十五期　国立台中师范学院

幼稚園評価の不足に関する検討

要旨

幼稚園評価の最も重要な目的は今の幼稚園教育の状況を把握することや全体的な幼稚園教育の質を向上させることである。しかし、ここ数年の評価報告書によって、幼稚園における問題は依然として繰り返し存在している。本論文では、これらの問題について、今の幼稚園評価の役割、モデル、評価委員、評価実践、そして評価結果の処理などの側面から幼稚園評価の不足や改善法を検討する。なお、本論文では、今の幼稚園評価における不足は：①結果の是非だけを重視するSummative評価を主として評価し、如何に改善するかに関する情報が少ない。②CIPPの精神によって評価すると言われているが、実際に評価する時には、CIPPモデルのような多元的ではなく、主として専門家の意見が評価に影響している。③評価委員たちが評価の基準に関して、それぞれの見地を持ち、よく主観的な判断や自分の好みによって評価する。④評価の項目は数が多く、煩雑であるので、異なる幼稚園に対するそれぞれの判断が難しい。⑤評価実践上における様々な問題点が存在する。ここで、本論では、今の幼稚園評価で不足している面やそれらの不足を如何に改善するかを通して、幼稚園評価の果たす役割について検討したい。

キーワード：幼稚園評価　幼児教育　幼児教育の質

一．幼稚園評価のはたらき

1．教育評価は、評価のはたらきによって、Formative評価とSummative評価に分けられている。

2．もとの幼稚園評価のねらい：Formative評価を主に、Summative評価を補助的な評価として存在するはず。

3．今の幼稚園評価の現状

①如何に改善に関する情報が少ない

②評価委員のアドバイスは話が大きい、抽象的（例えば、「子どもを中心として」、「道具が足りない」、「自分で考えてみて」など）であり、具体的に如何にするのかは不明確である。

③時間や金銭のため、善後処置が少ない

二．幼稚園評価のモデル

1．初期の幼稚園評価：「専門家的導き」である。つまり、何人かの専門家がいくつかの

公的基準によって、一定の時間にある教育施設を判断することである。

2. 現在の台湾における幼稚園評価：

①教育行政機関が主導し、民間の学術団体に依頼し、学者や専門家を評価委員として招く。

②評価期間は各県・市によって異なる。例えば、台北は 3 年ごとに一回、高雄は 4 年ごとに一回である。

③評価ハンドブックによって実施する

④評価の基準：行政、環境と設備、教授活動、地域とのかかわり

⑤評価の結果：評価委員たちが学者の意見を加え、評価を受けた幼稚園の 5 分の 1 を「成績優秀」幼稚園として表彰し、奨励金や賞状を与える。

3. 現行幼稚園評価の問題点

①評価委員は圧倒的専門家が多く、現場の教師が少ない。

②多くの園長は国立小学校の校長先生が兼任するので、幼児教育に詳しくない。

③評価委員たちは評価の標準がそれぞれである。

④教授の形式に対する評価のモデルがないので、評価委員たちがよく主観的な判断や自分の好みによって評価する　。

⑤評価委員の理念が異なるため、「初評」と「二次評」により異なる意見が出たことがある。

⑥新任の評価委員に対するトレーニングが系統的、厳格なものではないので、新任の委員たちは評価の精神や標準に関する理解が今一である。

⑦一つだけの「評価基準」によって様々な幼稚園を評価することがそれぞれの園の個性を無視することになってしまう。

⑧実際の評価は本当の CIPP モデル評価にはなお大きな差がある。

4. 幼稚園評価の役割：幼稚園評価は幼稚園を「監視」することから「助言」を与えることへの転換する必要がある。

5. 評価標準：

①一つの評価標準しかない（「台湾區公私立幼稚園評鑑実施要点」）。

②評価項目は数が多く、煩雑であるため、幼稚園側にとって見ただけでしり込みする。一方、評価委員にとっては、一つひとつの項目をより深い理解することが時間的には不可能である。

③評価基準における行政、教授、設備安全、地域とのかかわりという四つの部分の割合の不均等や一つの基準で公立と私立の幼稚園を評価することの不満が度々出てくる。

6. 評価実施

①最初の 1 ヶ月から 3 ヶ月の間の自己評価の役割を果たしていない。その原因は：

i 多くの園長は評価ハンドブックをもらった後に、園内研修より教師たちに配り、